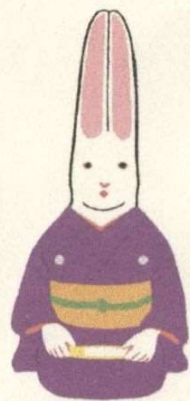


今戸焼 千支人形

唄卯 うたう



今から一八〇年前の江戸時代、今戸から山谷堀を越えたすぐ先に、江戸歌舞伎興隆の場となった猿若町が誕生しました。広重の錦絵「東都名所真乳山上見晴之図」には待乳山聖天山上から猿若町の芝居興行の賑わいを眺める参拝者の様子が描かれています。当家には花魁(おいらん)、禿(かむろ)、武内宿禰(たけのうちのすくね)、馬乗り加藤、虚無僧一本足など、歌舞伎の演目にゆかりのある古い人形の型があり、当時の流行や風俗を今に伝えていきます。

歌舞伎と共に発展した長唄は「歌いもの」と呼ばれる唄と三味線による音楽で、舞台の進行に合わせて、風景描写や心情を唄と三味線、囃子(笛・小鼓・大鼓・太鼓)の音色で表現しています。長唄は明治期以降も洗練を重ねて、江戸の情緒風情を伝える伝統芸能として一般家庭にも広がりしました。私の祖母や大叔母も三味線を嗜んでいました。

このたび、永きにわたり人々に愛され続ける歌舞伎と長唄の縁起にあやかり、今戸焼人形の月見兔が扇子を携え長唄の唄方となった新作の千支人形「唄卯」を作りました。皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

今戸焼 白井

六代 白井 裕一郎